

平城宮跡資料館 過去3回の発掘速報展における展示比較

1 はじめに

平城宮跡資料館ではリニューアルオープン以来、毎年度末に「発掘速報展」を開催し、その都度異なるコンセプトや展示手法に取り組んできた。本稿では、各年度の発掘速報展を振りかえり比較分析することで、今後の展示のありかたを考えたい。

2 発掘速報展 平城2009・2010

資料館のリニューアルオープン後初めての発掘速報展である（この展示については、『紀要2012』4～5頁でも触れているので、そちらも併せてご参照いただきたい）。

わかりやすい展示 9カ所にのぼる多くの遺跡を紹介するため、発掘調査の内容や成果を「わかりやすく」説明することを第一に心がけた。

整理された展示構成 まず会場を宮と京にエリア分けして、床の空中写真やパネル等で遺跡の位置を示し、壁面に各遺跡の展示をおこなった。調査の概要を記した解説パネルの横に遺構写真を、手前にその遺跡の遺物展示ケースを配置したコンパクトな構成にし、調査遺跡を効率的に把握できるようにした。

要点をまとめた展示解説 各遺跡の解説の項目を「遺跡の概要と調査の目的」、「調査で見つけた遺構と遺物」、「調査でわかったこと」、「わからなかったこと、今後の課題」に統一し、要点を押さえつつも簡潔な記載にした。テキストは、各調査担当者にそれぞれの項目を箇条書きで記入してもらい、展示企画室で再構成した。解説パネルには、キープランや遺構図を盛り込み、各遺跡タイト

表1 発掘速報展 一覧

年度	タイトル(会期)	展 示 遺 跡 名 (調査回数)
2010	発掘速報展 平城2009・2010 (2011.2.19～5.8)	平城宮第一次大極殿院地区(第454次) 平城宮東院地区(第446・469次) 平城宮東方官衙地区(第429・440・466次) 興福寺南大門(第458次)、興福寺旧境内(第2009～7次) 薬師寺東院(第457次)、海龍王寺旧境内(第456次) 春日東塔院(第477次)、平城京右京三条一坊八坪(第448次)
2011	発掘速報展 平城2011 (2012.3.10～5.27)	平城宮東院地区(第481次) 平城京左京三条一坊一・二坪(第478・486次) 興福寺北円堂院(第483次) ※文化財レスキュー展と同時開催
2012	発掘速報展 平城2012 (2013.3.16～6.2)	平城京左京三条一坊一・二坪(第478・486・488・491・495次)薬師寺食堂(第500次) 法華寺周辺(第501・504次) ※展示構成上、過去の調査も含む



図1 発掘速報展 平城2009・2010 会場風景

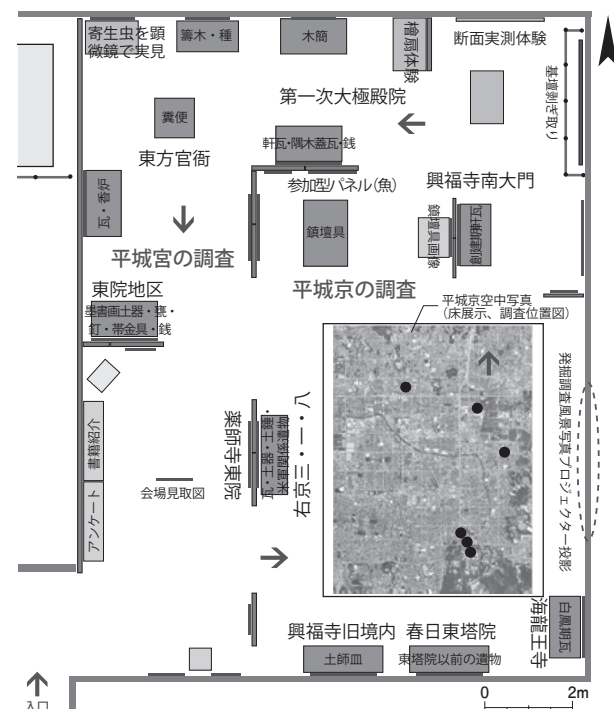


図2 発掘速報展 平城2009・2010 会場平面図

ルには「〇〇を発見!」のようなキャッチコピーをつけ、内容が頭に入りやすいようにした。

体験や親近感による理解促進 自身で体験してもらうことで、より遺跡や調査成果への理解が深まるよう、主に出土遺物に関連した体験コーナー（檜扇の紐を通す、寄生虫卵を顕微鏡でのぞく等）を随所に設けた。

発掘担当者によるギャラリートークや展示パネルの「担当者の声」など、研究員の生の声を届け、発掘調査を身近に感じられるようにした。

3 発掘速報展 平城2011

発掘現場の再現 2011年度の発掘速報展では、「遺構」をメインにし、発掘現場を探索しながら遺跡を理解する展示を目指した。

現場空間の演出 発掘現場の状況を再現するため、床に10分の1の遺構平面図を設置し、遺構図の上を歩きまわってもらえるようにした。左京三条一坊一坪の井戸は、原寸大の検出状況俯瞰写真を床展示した。井戸の出



図3 発掘速報展 平城2011 会場風景

土遺物を（この井戸の）俯瞰写真の上に配置したり、瓦溜りの出土状況を再現するなど、遺物を目線より低い位置に展示し、現場で遺物を検出する雰囲気を作った。

遺構写真は、床の平面図の各所に立ったときに見える各方角の遺構写真を、その場所にスタンドに立てたり、天井から吊るして、現場空間を演出した。

専門用語の使用 展示解説は前回と同様に項目仕立てにしたが、「基壇」「掘方」「切り合い」など発掘調査員が実際に使っている専門用語をあえてそのまま使用し、「リアル感」を出した。入館者が難解な専門用語の意味を理解できるよう、解説パネルの隣りに「発掘用語豆ちしき」のパネルを設け参照できるようにした。

発掘調査員の疑似体験 「なりきり！発掘調査員」と題して、床の遺構平面図の炉跡を探して数を数える（左京三条一坊一坪）、床の遺構平面図上で、回廊の幅や大きさを測る（興福寺北円堂院）、遺構平面図の柱穴のサイズ、並び、重複を観察し、建物線を結ぶ（東院地区）体験コーナーを設けた。いずれも、発掘現場で調査員がおこなう動作を模したもので、各遺跡や遺構の特徴をふまえた内容とした（『紀要2012』4～5頁参照）。

4 発掘速報展 平城2012

発掘調査員の思考過程をたどる 2012年度は、発掘調査で研究員が、いつの段階で、何を考え感じ、どのようにして遺跡を解明しようとするのか、「発掘調査員の頭の中」を紐解く展示を試みた。

思考過程を表現したデザイン 脳の神経細胞（シナプス）の形状をイメージした円とそれをつなぐ線をモチーフに、床面と展示パネルのグラフィックを統一した。床の線が順路となって、入館者を次の思考段階（床の円形マーク、タイルカーペットの色を変えて表現）へといざない、段階ごとに展示をみるレイアウトにした。円がポイントになっていることから、ラウンドパーティションを設置し、壁面にも曲線をもたせた。

リーフレットの形状は、前2回の速報展では見やすさ

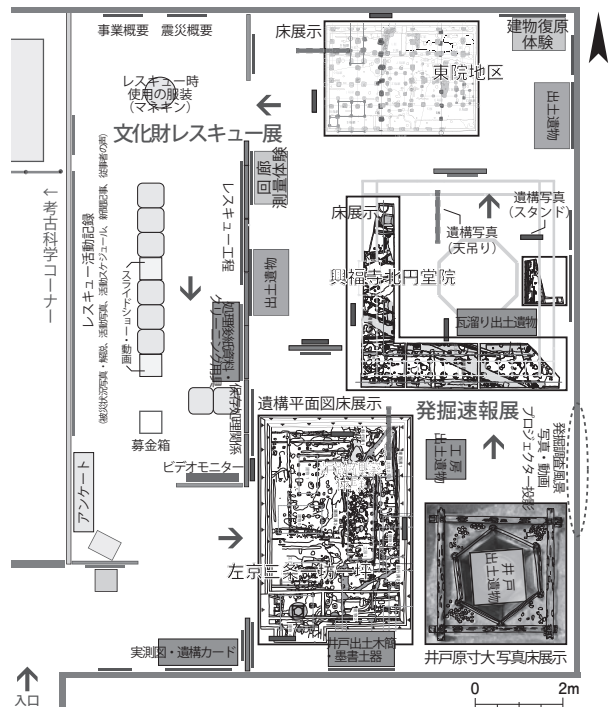


図4 発掘速報展 平城2011 会場平面図

と紙面の多さからA4サイズの「観音折」にしたが、今回は、ページを開くごとに思考が展開していくイメージが表現できるハンディサイズの「蛇腹折」を採用した。

各遺跡の思考の展開 展示した3遺跡では、それぞれの思考の展開の特徴を活かした展示構成を考えた。

左京三条一坊一・二坪は、5次にわたる調査の度に検討を重ねていった試行錯誤のようすを、ぐねぐねと曲がる木の幹のような床の導線で表し、遺跡各次数ごとに、発掘調査員の心境（調査前の予想、遺構が見つかったときの心境、そこから派生した疑問など）が段階的に書かれた段ボールPOPを思考回路の道標的に配置した。

薬師寺食堂の調査では、絵図や文献資料、過去の伽藍内調査で得られた情報や他の寺院の調査成果と照らし合せながら、発掘調査前に予想を立て、調査後もこれらの情報を参考にしつつ、さまざまな角度から遺跡を考えていくようすを示した。

法華寺周辺の調査では、小規模で断片的な調査を長年にわたり記録し積み重ねていくことで、一帯の様相解明に繋がるさまを、MAPケースに見立てた段ボール引出しと一帯の既調査区めぐりと組み合わせで表現した。

来館者相互の参加型展示 左京三条一坊一・二坪と薬師寺食堂には、参加型のコーナーを設け来館者自らが遺跡について考えをめぐらせたり、他の来館者のコメントに書きこむなど相互交流の場を作った。

5 各発掘速報展の展示比較

以上の3年度にわたる発掘速報展で、展示にどのような変化がみられたのか考察する（図7）。



図5 発掘速報展 平城2012 会場風景

展示者（研究員）と来館者の関係 3つの展示では、展示を通じた研究員と来館者の関係性が異なっている。

速報展2009・2010は、展示者（研究員）＝調査成果の伝え手、来館者＝受け手と、立ち位置が分かれており、展示を媒体とするコミュニケーションの方向は研究員から来館者へと一方方向である。速報展2011では、来館者が展示上の「発掘現場」を歩き調査の疑似体験をすることで、研究者と同じ空間に立ち調査成果を読み取る、両者が対等な関係にある。さらに速報展2012では、来館者が研究員の頭の中に入り込み、一体化している。

展示の主題・範囲 どの部分を展示として来館者に示すか、展示の主題や範囲にも違いが出た。

速報展2009・2010は、調査内容や成果が展示対象であり、速報展2011は、調査成果だけでなく発掘現場の空間そのものを展示として考えた。速報展2012に至っては、研究員が成果を導き出すまでのプロセスに展示の主眼を置いている。

解説型展示からの脱却 速報展2009・2010では各遺跡ごとにコーナーが体系的に構成され、調査の内容や成果が一目でわかる。従来の博物館にみられる教育・啓蒙的な「解説型」の展示タイプといえる。

速報展2011は説明的な解説は加えず、遺構や遺物の検出状況など発掘現場のありのままの空間を提供することで、入館者自身が展示空間から遺跡を感じ取る余地ができた（体感による間接的な影響）。受け身な「解説型」の展

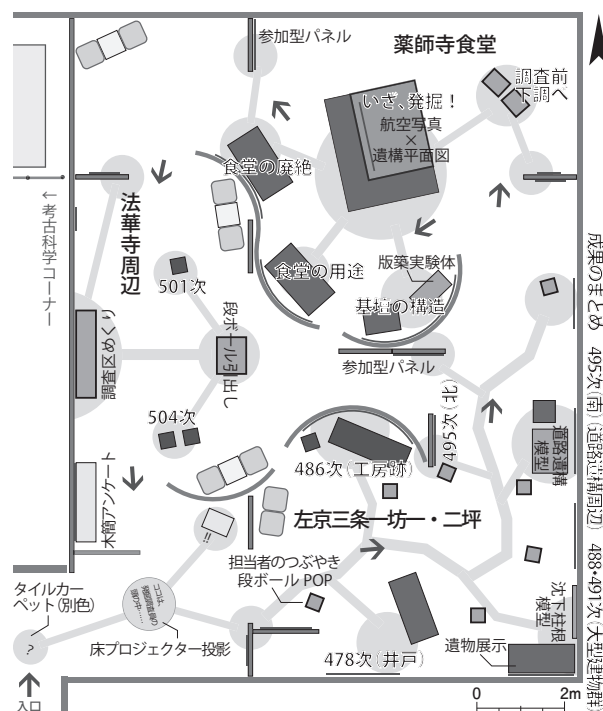


図6 発掘速報展 平城2012 会場平面図

示から、自発的な「体感型」の展示となった。

さらに速報展2012では「頭の中」というイメージを形にし、物理的な空間の体感から、内面部分に対する体感へと移行した。成果をまとめて提示するのではなく、思考過程に沿って段階的に示し不規則に展開する展示空間を来館者がたどることで、自ら次の展開を思考しようとする「想像力を引き出す」展示に発展している。

6 おわりに

発掘速報展は、調査成果を報告する単調な構成になりがちであるが、異なる角度から展示を組立てることで、各年度ごとに展示に特色を持たせることができた。2012年度は、所謂「解説的な」展示とは全く異なる「思考過程」というアプローチをとったため、慣れない展示構成に苦勞し、コンセプトに沿った展示が十分に達成できたとは言い難い。しかし困難であった部分にこそ、開拓の余地があるように思う。今後も積極的に展示の新しい可能性を見出ししていきたい。

(渡邊淳子)

(渡邊淳子)

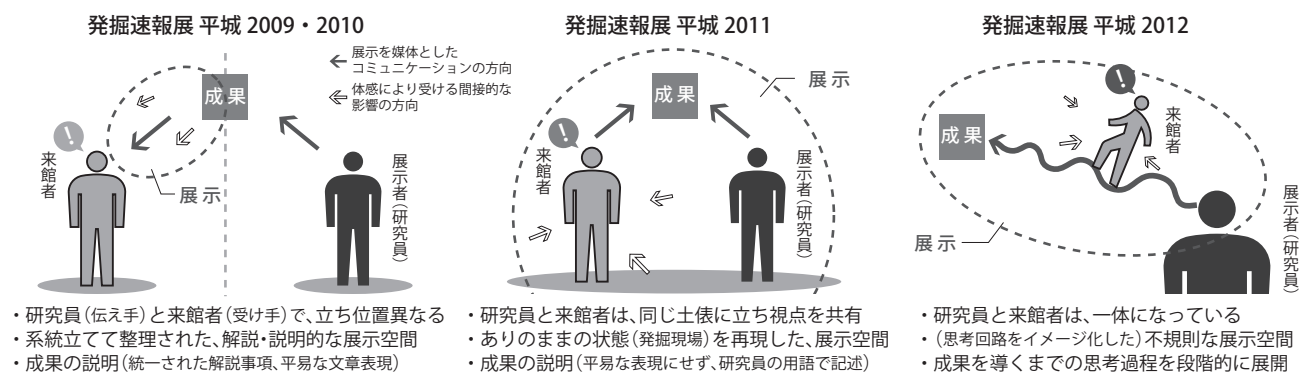


図7 各発掘速報展の展示概念図